

## 二条天皇の六波羅行幸をめぐって

Furusawa, Naoto / 古澤, 直人

---

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

多摩論集 / 多摩論集

(巻 / Volume)

34

(号 / Number)

別冊

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2018-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014859>

## 二条天皇の六波羅行幸をめぐる

古澤直人

はじめに

古澤 平治の乱にかんする有力な学説として、信西が討たれたのは後白河上皇の意思であったという河内祥輔氏の学説がある。<sup>(1)</sup> 筆者は別稿で河内氏の学説のうち、平治の乱の要因および三条殿焼き討ち（十二月九日事件）にかんする学説<sup>(2)</sup> 検討をおこなったが、二十五日・二十六日事件にかんしては課題として残したままであった。本稿では、二十五日事件に至る過程での重要な事件である二条天皇の内裏からの脱出、いわゆる「六波羅行幸」にかんして検討を行うことにしたい。

### 1 貴族社会の反応

九日事件に対して、貴族社会がいかなる反応をしたのか。まず、九日事件以後の史実を確認しておきたい。

十二月十日 信西子息（俊憲・貞憲）等の解官<sup>(3)</sup>

十二月十三日 信西自害<sup>(4)</sup>

—— 十三日 貞憲土佐へ配流<sup>(5)</sup>

十二月十四日 (除目) 源義朝「從四位下・播磨守(伊予守)」、源頼朝「從五位下 右兵衛權佐」、源重成「信濃守」等

十二月十五日 藤原朝方「五位藏人復任」<sup>(9)</sup>「左少弁復任」<sup>(10)</sup>

——十五日 源光保、信西居所を尋ね出し、信頼の命により屍を掘り出し斬首する<sup>(11)</sup>

十二月十七日 信西の首、大路を渡し獄門に梟せらる<sup>(12)</sup>

——十七日 清盛帰京<sup>(13)</sup>

十二月二十二日 俊憲越後へ配流<sup>(14)</sup>

以上、信西子息の解官、参加者への論功行賞、信西の梟首、信西子息の配流(決定)という行動しか認められず、この〈共同謀議〉が、それ以外の目的をもたなかったことが推測される。

これに対して行動を起こしたのが、上流貴族だった。『愚管抄』は次のように伝える。

〔史料A〕『愚管抄』巻五、大系、二三〇頁<sup>(15)</sup>

<sup>(A1)</sup>大方世の中には三條内大臣公教、その後の八條<sup>(実打)</sup>太政大臣以下、<sup>(A2)</sup>さもある人々、<sup>(A3)</sup>「世はかくてはいかせんぞ。信頼・義朝・師仲等が中にまことしく世をおこなふべき人なし」。<sup>(A4)</sup>主上二條院の外舅にて大納言経宗、ことに<sup>(A5)</sup>鳥羽院もつけまいらせられたりける惟方(檢非違使別当にてありける。この二人主上にはつきまいらせて、信頼同心のよしにてありけるも)、<sup>(A6)</sup>そ、やきつ、やきつ、<sup>(A7)</sup>「清盛朝臣ことなくいりて、六波羅の家には有ける」と、<sup>(A8)</sup>とかく議定して、<sup>(A9)</sup>六波羅へ行幸をなさんと議しかためたりけり。

清盛帰京後の朝廷において、九日事件を実行した貴族グループに対して、『愚管抄』が挙げるのは内大臣公教とその父八条(前)太政大臣実行であり<sup>(A1)</sup>、実質的には公教であった<sup>(18)</sup>。公教を実質的なリーダーとして、「<sup>(A2)</sup>さもある人々」(上流貴族<sup>(19)</sup>)らが反対行動を起こした。上流貴族は、信頼・義朝・師仲らに〈朝廷を適切に主導する人はいない〉

(A<sub>3</sub>) という判断のもとに、経宗・惟方に働きかけ、密談して(A<sub>6</sub>)、清盛が「ことなく」(無事に)入京し六波羅に入つた(A<sub>7</sub>)、ことを合議して打合せ(A<sub>8</sub>)、六波羅への(二条天皇の)行幸策を決した(A<sub>9</sub>)。筆者は九日事件後の事実認識の材料である『愚管抄』の記述を右のように理解する。そして事実認識にかなする限り河内氏の理解と近い。しかし、その背後の動機、あるいは因果関係の理解については解釈を異にする。

河内氏は、公教らの信頼らに対する不信を裏返せば信西に対する評価があるとされ、信西も公教も(鳥羽の遺志の遵奉者であつた)点に、公教の信西への評価さらに公教の行動の動機を求められている。(20)

しかし「鳥羽の遺志」がなによえ公教による行動のモチーフたりえるのか、なぜ、切り札的な拘束力もちうるのかが理解できない。「史料A」で言えば、信頼グループに「世をおこなふべき人なし」(A<sub>3</sub>)というのが、九日事件とその直後の経緯からする蜂起貴族集団への判断であり、それ以上はなにも記されていない。そして、この文脈で、鳥羽院の意思に触れられているのは、「鳥羽院もつけまいらせられたりける惟方」(A<sub>5</sub>)についてであり、その惟方が主上につきまいらせ、九日事件では信頼らに与同したのである。上級貴族らは蜂起貴族を支持しなかつたため、クーデターの鎮圧行動に出たのであり、それ以上の背景は知ることができない。

## 2 二条行幸の連絡とその経緯

ここで二条天皇を奉じた決定について、河内氏はこれは「後白河と信頼が協調関係にあることを証する」ものとされ、「公教の謀議の本質は、後白河に対して矛先を向けたものであるとみななければならない」が、公教らは後白河とあからさまに真正面から対決する愚行は避け、後白河の周囲(具体的には側近頭目の信頼)を肅正して解決を図ろうとしたとされる。(21)

しかし六波羅への天皇行幸に関して、後白河に対する主上行幸の連絡は、「史料B」にみられるように決行当日の夜、

決行に先立って行われている点が重要である。

〔史料B〕（『愚管抄』巻五、大系、二二二頁）

「よし〜」とてぞ、<sup>①</sup>有けるしたくのごとくしたりけり。

<sup>②</sup>夜に入て、惟方は院の御書所に参りて、（小男にて有けるが直衣にくゝりあげて）<sup>③</sup>ふと参て、そゝやき申て  
出にけり。<sup>④</sup>車は又その御料にもまうけたりければ、<sup>⑤</sup>院の御方の事はさたする人もなく、<sup>⑥</sup>見あやむ人も  
なかりければ、<sup>⑦</sup>覚東なからず。

<sup>⑧</sup>内の御方にはこの尹明候なれたる者にて、むしろを二枚まうけて、庭道に南殿の廻廊に敷て、一枚を歩ま  
せ給ふ程に今一枚をしき〜して、内侍には伊与内侍・少輔内侍二人ぞ心えたりける。<sup>⑨</sup>これら先しるしの御  
はこ宝釧とをば御車に入てけり。支度の如くにて焼亡の間、さりげなしにてやり出してけり。

〔史料B〕の部分は、清盛が名簿を信頼に献呈して、信頼を安心させた話の続きであるが、この文脈によれば、日  
が暮れて惟方が（二条天皇の脱出工作について後白河に）ひそかに伝えたのである<sup>⑩</sup>。河内氏は<sup>⑪</sup>の「夜に入て」  
について「言い方は曖昧であり、二条が内裏から出る前か後か明瞭ではないが、普通には脱出後とみるべきであろう。」  
と記されている。<sup>⑫</sup>河内氏が主張されるごとく、信頼らの信西襲撃が後白河の意思であり、公教の工作が逆に後白河の  
意図封じ込めにあつたとすると、二条天皇の内裏脱出という最高機密を脱出前に後白河上皇に漏らすことは通常考え  
にくいから、こうした記述をされているものと推察される。

しかし、「夜に入る」は辞書的語義では「夜になる。日がくれる。」<sup>⑬</sup>であり、『愚管抄』の用例は、このほかには二  
例ほどしか確認できなかったが、<sup>⑭</sup>いずれも辞書的な意味どおり、「日が暮れる」つまり、夜になってすぐの意味である。  
よつて〔史料B〕でも、文脈どおり、日が暮れてすぐ後白河に伝達してから、内の御方の工作が行われたのである。

一方、天皇方の工作は夜遅くに行われる手はずであった。この「有けるしたく」（天皇脱出工作準備）<sup>⑮</sup>について、  
『愚管抄』では清盛が実行役の尹明に「こまかにおしへけり」（細かく指示した）とある。その内容が次の〔史料C〕

である。

〔史料C〕（『愚管抄』巻五、大系、二二二頁）

十二月廿五日乙亥丑の時に、六波羅へ行幸をなしてけり。そのやうは、清盛、尹明にこまかにおしへけり。「ひるより女房の出んずるれうの車とおほしくて、牛飼ばかりにて下すだれの車をまいらせておき候はん。さて夜さしふけ候はん程に、二條大宮の辺に焼亡をいだし候はゞ、武士どもは何事ぞとてその所へ皆まうで来候な25んずらん。その時その御車にて行幸のなり候べきぞ」とやくそくしてけり。

ここには、天皇の脱出工作のために、怪しまれないように、昼間から女房の乗る車の用意をしておくことや、深夜26になって27、二條大宮に火事を起こし、武士らの注意を引いて、その間に行幸をなす策が記されている。行幸は深夜に二條大宮の辺に放火した後の予定であった。

古澤　そして実際に火事に紛れて二條天皇および神爾・宝剣28を内裏から送り出した後、尹明が、玄象29以下の道具類を長櫃に入れて天皇を追うようにして六波羅に向かい、六波羅に入ったのは「ほのほのとす程」(夜があけるころ)であった。『愚管抄』によるかぎり、後白河への機密伝達から、内裏脱出はそれなりに時を隔てたものであった。この事実関係は、それなりの精度をもって確認できる問題といいうるであろう。

この後白河への二條行幸情報伝達と、実際の二條行幸との間の「時間」のズレにかんする考証によれば、二十五日事件にかんする構図理解とそれにとまぬ公教や後白河など人々の思惑にかんする河内氏の理解は成立しにくいもののように思われる。

その後、公教・清盛らは二條天皇の六波羅への行幸を京中に触れ回り、摂関家の忠通・基実父子をも六波羅に迎えるなど、天皇奉戴という正統性獲得に加え貴族社会の主流をおさえ多数派をも掌握した。密教修法に詳しい鳥羽院の七宮(覚快法親王)の京・白河の僧坊へも使いを派遣し、「行幸六波羅になり候、よくよく祈り申させ給へ」と、おそらくは戦勝祈願あるいは怨敵調伏を命じているのは、用意周到といふべきであろう。28

しかし、仁和寺に逃れた後白河についていえば、事件に対してここでも「傍観者」<sup>29</sup>であった。

「乱の主役は、信頼・義朝であり、また天皇親政派の経宗・惟方及び清盛であった。そして彼等の間での争奪の対象となったのは二条天皇であって、上皇ではなかった」<sup>30</sup>。以上を記した安田元久氏の理解が事件と後白河の関係について事実に近いものと考えられる。

### まとめ

二条天皇の六波羅行幸にかかわる以上の検討をまとめておきたい。

清盛帰京後、九日事件を實行した貴族グループに対して、内大臣公教を實質的なリーダーとした反対行動が起きた。公教らは、謀議貴族に政治の適切な運営能力はないという判断のもとに、経宗・惟方に働きかけ、六波羅への二条天皇の行幸策を決した。以上の筋道の理解は河内説に従いたい。しかし、その公教らの動機については見解を異にする。河内説では、公教の行動の動機に（鳥羽の遺志）を措定するが、この拘束力については明証に欠けていて従えない。公教らは、信頼グループへの不支持あるいは反発からクーデターの鎮圧行動に出たのであり、それ以上の背景は知ることができない。河内説では、二条天皇を奉じた公教らの謀議の本質は、信頼と協調していた後白河に向けられた行動で、真正面から対決する愚行は避け、周囲を肅正して解決を図ろうとしたとされる。しかし、後白河上皇への主上行幸という機密の伝達は、日が暮れてすぐ行われ、その後かなりの時間をへた深夜に計画は決行され、二条天皇が六波羅邸に到着したのは夜明け頃であった。この機密伝達と決行の時間の間かなりの時間の存在が河内説の反証となるものと想定される。二条を奉戴したことは、後白河が傍観者にとどまったことを示す事実と思われる。

## 注

(1) 河内祥輔『保元の乱・平治の乱』（吉川弘文館、二〇〇二年）

(2) 拙稿「平治の乱の要因と十二月九日事件の経緯について」（『経済志林』八〇巻四号、二〇一三年）

(3) 『公卿補任』①、四四六頁、『尊卑分脈』①、四八七頁。

(4) 『尊卑分脈』②、四八五頁。

(5) 『尊卑分脈』②、四八六頁。

(6) 『尊卑分脈』③、二九〇頁、『愚管抄』、古典文学大系（以下、大系と略す）、二二九頁。『愚管抄』、『平治物語（陽明本）』新古典文学大系、（以下、新大系と略す）一六〇頁で「播磨守」とする。『尊卑分脈』では伊予守と記す。

(7) 『尊卑分脈』③、二九六頁。『公卿補任』文治元年に「同（平治元年）十二月十四日任右兵衛権佐」とみえる（①、五一〇頁）。

澤

(8) 『平治物語（陽明本）』新大系、一六〇頁。信濃守は信西の子是憲の後任になるため軍記の記事のみだが記した（同書一五七頁脚注三三参照）。

(9) 『藏人補任』（統群書類従完成会、市川久編）、二二三頁。

(10) 『弁官補任』①、一七六頁。

(11) 『尊卑分脈』②、四八五頁。

(12) 『尊卑分脈』②、四八五頁。『百鍊抄』同日条。

(13) 『愚管抄』（岩波書店、日本古典文学大系、以下、大系と略す）、二三〇頁。

(14) 『公卿補任』①、四四六頁。

(15) 『愚管抄』は文脈が入り組み、挿入的文言が次々と入れられて文意がとりにくい。本稿では片仮名を平仮名に改め、挿入的文言は括弧に入れてポイントを落とし、引用部は鉤括弧に入れ、文意をとりやすくした。



- (16) ①の前に「やがて(清盛)十二月十七日に京へ入にけり。すべからく義朝はうつべかりけるを。東國の勢などもいまだつかざりければにや。これをばともかくもさたせでありける程に」とあり、清盛の帰京が記されている。
- (17) 中島悦次『愚管抄全註解』(有精堂、一九六九年)三八四頁脚注によれば、東京大学図書館所蔵本では「とかく」は「かく」とされている異同が記されている。
- (18) 河内、前掲『保元の乱・平治の乱』、一三八頁。公教の序列は『公卿補任』で見ると第四位だが、この点で河内氏の指摘されるように、第一位太政大臣宗輔は八十三歳で、第二位の伊通は六十七歳と高齢で、三番目の関白・右大臣基実はまだ十七歳であったから、公教主導は上流貴族の実質的な筆頭としての行動と位置づけられるだろう。ちなみに、反乱貴族では経宗が第九位、信頼が十七位、源師仲が十八位、惟方が二十五位である。なおこの年は、四月二日の臨時除目があった日に、権中納言伊実(十三位)、参議公親(十九位)、参議源定房(二十二位)が、いずれも「依朔日旬無故不参」の理由で解官されている(『公卿補任』①、四四五頁)。
- (19) 「さもある人々」を、大系頭注は「もつともな(人々)」と注するが(二三〇頁)、中島悦次、『前掲書』は、「相当な人たち」と注している。中島の解釈に従い、上流貴族とした。
- (20) 河内、前掲書一三八―一三九頁。
- (21) 河内、前掲書一四〇頁。
- (22) 河内、前掲書一四八頁。
- (23) 「よに入る」を『日本国語大辞典第2版』は、「夜になる。日がくれる。」と語釈をつけ、宇津保と源氏の例を挙げている。
- (24) ①「朝より夜に入るまで雨をおしみてありけり。いかばかり僧正も祈念しけんに、夜に入て雨しめ、とめでたくふりて……」(大系、二八九頁)とあり、この場合は「日が暮れる」の意だろう。②「拝賀とげける。夜に入て奉幣終て、宝前の石橋をくだりて……」(大系、三一頁)と、これは実朝暗殺の記述であるが、やはり日

が暮れてすぐと考えられる。

- (25) 参考までに、清盛の指示の内容「……」を、大隅和雄『愚管抄全現代語訳』（講談社学術文庫、二〇一二年、二五四頁）によって、掲げておく。「昼のうちから女官が出かけるための車と思われるように、牛飼童だけで簾の下から帳が外に垂れている車を用意させておこう。さて、夜も深くなつたところに、二条大宮のあたりで火事を起こすことにする。そうすれば武士どもは何ごとかというわけでその火事の場所にみな参つてくるであらう。その機会をのがさずに用意の車にお乗りになつて、行幸が行なわれるはずである。」

- (26) 琵琶の名器。九世紀中頃、遣唐留学生藤原貞敏が琵琶博士簾承武から譲り受けて帰朝し、以後歴代天皇の御物となつたが、今は伝わらない（『日本国語大辞典第2版』）。

- (27) 旧大系、二二三頁。なお、『愚管抄』の「ほのほの」については、保元の乱の白河殿攻撃に関してではあるが、早川厚一「『保元物語』『平治物語』合戦譚の検証」『名古屋学院大学論集（言語・文化編）二二二―二〇一二年、八七―九〇頁で「鶏鳴」との関わりで詳しい考証が行われている。

- (28) 『愚管抄』巻五、大系、二三四頁。

- (29) 安田元久『平家の群像』（塙新書、一九六七年）五二―五三頁。

- (30) 安田元久、『後白河上皇』（吉川弘文館（人物叢書）、一九八六年）、八〇頁。